

# 相談ネットワーク通信

2024. 11月11(月)

子育て・教育なんでも相談ネットワーク

No. 129

700-0822 岡山市北区表町1-4-64 上之町ビル3F

TEL・FAX 086-226-0110 Eメール: soudan-net@vivid.ocn.ne.jp

ホームページアドレス <http://www.soudan-net.sakura.ne.jp>

(1) 私の住まいは、田園に囲まれた造成団地で、自然豊かな、生物の多様性にも恵まれています。暖かい季節になると、庭にも各種の昆虫たちがあらわれ、それを捕食するアマガエルやアオダイショウ、カナヘビなどの生き物も姿を見せます。

## カナヘビ雑話

相談員 山本和弘

「カナヘビ」は「ヘビ」という名はついていますが、見かけの通りトカゲの仲間です。日本でもっともポピュラーなトカゲは、このカナヘビ(ニホンカナヘビ)と、ニホントカゲ、ニホンヤモリの三種。私などは、このカナヘビの方が慣れていて、子どもの頃はこれを「トカゲ」



蛇足になりますが、「カナヘビ」の名前の由来には、①「金蛇」＝金属色のヘビ、②「愛(可愛い)蛇、などの説があるそうです。孫たちは、カナヘビを見つけると「可愛い」と叫んで追いかけますから、「愛蛇」の命名由来にも合点がいきます。草陰からこんなひょうきんな姿が見えると、ついカメラを向けたくくなります。孫たちも、赤ちゃんカナヘビを手のひらに載せて遊ぶのが好きでした。



と呼んでいました。敬愛する写真家土門拳さんの写真にトカゲで遊ぶ子どもが出てきますが、これもカナヘビだったかもしれません。



(2) 去年の夏、大阪の孫(保育園児)が、庭で捕まえたカナヘビをプラケースに入れて飼おうとしたけれど、食欲もないし元気もないので、帰阪前に逃がしてやりました。が、よく見ると土の中に卵を産んでいるらしいのでそのまま持ち帰っていたところ、2匹が孵化したのだそうです。



ける自信がないというので、正月の帰省の際、このカナヘビ2匹も「里帰り」することになりました。「里帰り」とは言っても、庭に放しても冬眠に失敗する恐れが高いため、暖かい季節が到来するまでは、リビングルームで賓客待遇でもてなすことにしました。

人工餌はお口に合わないようで、生き餌を調達しなければなりません。あいに、野原で小昆虫を採集できる季節ではないので、ベツ

トシヨップを物色することになりました。小型でおとなしく、柔らかいヨーロッパパイエコオロギ(略称「イエコ」)が適当らしいのですが、あいにくSサイズが売り切れで、試しにMサイズと、頑強なフタホシコオロギのSサイズを購入して帰りました。

コオロギ飼育のにわか勉強に明け暮れるうちに、幼カナヘビも徐々に成長し、人工餌も口にするようになってきましたし、多少大きめのコオロギも十分捕食するようになっていました。かなりの食欲ですので、餌を切らさぬよう頻繁にペットシヨップに通うのも、なかなか厄介です。

(3) 生で、産卵・孵化のための留意が必要ですが、デュビアは卵胎生なので、条件さえ整えば次々に子どもが生まれるのだそうです。ですが、買い求めてみると、デュビアは市販の最小サイズでも幼カナヘビの口には大きすぎます。ましてや、成熟した親は、論外の巨大サイズです。(写真を示したところですが不快を覚えられる方もおありでしょうから割愛します。笑)とすれば、生まれたての幼デュビアに期待するしかありません。

こうして、カナヘビの飼育は、同時にコオロギやデュビアの飼育・繁殖の労力を伴うことになったのでした。飼育ケース、床材、餌、水やりなど、研究成果を披瀝すれば長大な文章が書けますが、これも割愛させていただきます。(笑)

(3) 季節は巡り、保温装置なしでも生育できる気温になると、コオロギたちは妙な

る音色で虫の声を奏でるようになり、いつのまにか自然産卵して、無数のジニアが孵化してきました。相前後して、幼デュビアも次々と誕生してきて、カナヘビ2匹にはとても食べきれない量の生鮮食品が確保できました。でも、一步戸外に出れば、捕虫網一振りで潤沢な生き餌が手に入る季節。出費と手間暇をかけてイエコやデュビアの飼育を続ける必要があるのか。そもそもカナヘビたち自身を早く野生に戻してやるべきではないのか……。葛藤は尽きませんが、世話の焼ける同居者たちに、癒やされる毎日でした。

(4)

私の所属する「岡山高退教」(高校・障害児学校退職教職員の会)の会報最近号に、以上のような内容の記事を、掲載していただきました。その後日談をかいつまんで書きます。

記事執筆からさほど日も

経たぬうちに、2匹のカナヘビは相次いで昇天してしまいました。彼らが住んでいたプラスチックケースは主を失って空になり、餌として飼育していたコオロギ、デュビアは元気に繁殖しています。外来種なので外に逃がすわけにもいかず、これを消費してもらうために、小さなカナヘビを一匹、庭で捕まえました。野生だけに警戒心が強く、なかなかつきませんが、小さなコオロギ・デュビアは口にしてくれるようになりました。でも、次第に涼しさが感じられる頃になると、自然状態で冬眠させてやった方が良いのではと思えて、寒くなる前に庭に逃がしてやりました。

コオロギとデュビアの処遇問題は振り出しに戻り、小四の孫と相談して、一緒にペットショップを訪ね、特売中の「レオパ」を買ってきました。「レオパードゲッコー」や「ヒョウモントカゲモドキ」やモリの仲間だそうです。写真を載せたいところです。

が、爬虫類が苦手の読者もおられましようから、孫が描いたイラストをご紹介します。

やまもと かずひろ



今年の夏は例年になく暑く、「連続真夏日」の新記録が大幅に更新された地域も多い。台風が直撃し大災害が起こった地域もあれば、雨が何日も降らず、カラカラ

天氣に悩まされるところもあった。異常な高温に野菜を作っている農家(家庭菜園を含めて)では悲鳴を上げていた。夏野菜のトマトは早くから枯れていく、ジャンボピーマンはミニピーマンに、キュウリも立ち枯れで。店頭では一本100円を超える値段に！高温に加えて雨が少なかったところでは、里芋も水不足で成長できない。その上、9月になっても気温が下がらず、冬野菜の種まきができない。やっとなんかでは発芽しないか、発芽してもとけてなくなる。大根を3回も蒔いた、やっとなんか3回目でも育ち始めた。こんなことは今までに経験したことがないと高齢の方の話。

それでも一日一日が過ぎていく。いつの間にかカレンダ―も残り二枚、育ちかけた大根が楽しみな鍋の季節になった。会員の皆様、お体に気を付けてお過ごしください。

相談ネットワーク

相談員一同

# わたしの一冊

相談員

秋山 正美



## 川滝少年のスケッチブック

作 小手鞠るい  
絵 川瀧 喜正  
KODANSHA

『岡山市の一宮公民館に  
『小手鞠るい』のコーナー』

が設けられていました。「広島の高校生が描いた原爆の絵展」のお手伝いに行ったとき、この本が目に残りました。一宮地域に住んでおられる彼女のお父様が公民館に寄付をしてくださったので、それを機会に「小手鞠るいのコーナー」が設けられたそうです。絵の来場者が途絶えた時手に取ってみました。読む時間がなかったもので、早速その日のうちに書店で購入して読みました。お母さんと子ども、おじいちゃん和孫の会話など、構成を工夫し、読み手を「こ

ども」と想定した書きぶりなので、読みやすいです。そして、この本の肝でもある、中に使われている絵(漫画です)がとってもステキなんです。この漫画を描いたのは小手鞠さんのお父さん(川瀧喜正さん)です。お父さんは、子どもの頃から絵が好きで、その頃からずっと(戦前、戦中、戦後)くらしの様子をスケッチブックに日記風に描いていたそうです。

初めは、川滝少年の生まれ育った宇和島の紹介。子どもの頃のおそびや祭り、食べ物などなど、少し懐かしくも感じながら読みました。岡山県へ転居し、少年が成長するにしたがって、日本は戦争の道へと進んでいきます。当時の少年がそうであったように、川滝少年も「軍国少年」としてそだちます。難関の岡山工業高校(岡工)に入学しても、授業よりも「軍事訓練」「勤労奉仕」が多くなったようです。その様子も漫画日記にはしっかりと残っています。漫画ではなく現実だったのですが。その後、通学途中でグラマンに攻撃された列車から飛び降りて、九死に一生を得たこと、岡上空襲や広島への原爆投下、敗戦後のくらしなど、川滝少年のスケッチブックはつづきます。漫画のように。でも、小手鞠さんの文章は、わたしに、これは漫画ではない現実だよと訴えてきます。

小手鞠さんはお父さんから送られたこのスケッチブックの存在を知りながら、そのままになっていたそうです。その理由をあとがきの中でこのように書いています。「私は、そのころ、戦争にも、平和にも、関心がな



# 被団協 ノーベル平和賞受賞に寄せて

相談員 衣笠 祥子

被団協(原水爆被害者団体協議会)のノーベル平和賞受賞は、暗いニュースの多い昨今、日本の平和運動をとっても勇気づけました。

核兵器禁止運動を地道に続けてきた組織が受賞したことは、一団体の受賞ではなく多くの国民の受賞であり、地球上で戦争が続く今、重要な意味を持つと思う。

学生時代、夏休みになると『核兵器禁止条約を求める署名と原水禁大会参加カンパ袋』を持って、大学周辺を軒並み訪問していたことを懐かしく思い出す。ほとんどの家が署名と少しばかりのカンパで協力してくれた。50年以上経った現在では、不審者と思われるのに・・・世の中変わったものだ。午後は表町の街頭に立って訴える日もあった。「真っ黒になって・・・何をしとん!」と、母に嘆かれたことも

なつかしい。そのカンパで広島原水禁大会へ鈍行列車で参加したものだ。

それ以降、原水禁運動だけでなく平和運動やあらゆる民主運動が、長い困難な時期を経て現在にいたっている。50年以上前のあの暑い夏のスローガン「核兵器禁止条約」がやっと締結された。残念にも日本政府は参加していないが、きつと近いうちに世論が勝つだろう。毎回、毎年、多くの国民が署名を集めて、政府へ国連へと届けてきた運動が、今回の受賞になったのかと感慨深いものがある。

9月末、和歌山で開催された「日本母親大会」へ参加し「第五福竜丸みんなの船」ビキニ水爆実験70年、世界のヒバクシャとともに核兵器なき地球を」安田和也(第五福竜丸展示館員)さんの話を聞きました。ビキニ水爆実験では第五福竜丸だけでなく多くの漁船が被爆し、平凡な家庭や

仕事を奪ったことや、マーシャル諸島の人や海や土地も甚大に被爆したことを、憤りをもって思い出しました。

広島・長崎・ビキニと被爆経験をした日本国民には、政府が核兵器禁止条約に参加し、世界の人々に核のもたらす破壊や子々孫々までの苦しみを伝える先頭に立つことが強く求められています。「第五福竜丸は今も航海を続けています、核も戦争もない平和な港に錨を下す時に航海を終えることができる(安田)」

早く、第五福竜丸を静かな港で休ませてあげたい。

きぬがさ さちこ



# 「不登校」を考える

⑥

相談員 福田 求  
(“のはな”教育相談)





























